

〈論文〉

ペルー・インディヘニスモ再考
—「メスティサヘ」の視点から—

後 藤 雄 介（一橋大学大学院）

はじめに——問題の所在

本稿は、19世紀末から20世紀前半にかけてのペルーの代表的なインディヘニスモの言説を、当時の国民形成のあり方をめぐる議論の文脈のなかに位置づけ、新たに「メスティサヘ(mestizaje)」をキーワードに読み直すことを目的としている。

ラテンアメリカの思想上重要な一潮流をなすとされているインディヘニスモは、コロンブスのアメリカ大陸到達を期に「インディオ」と命名されて以来、基本的に今日に至るまで、従属的な地位に置かれてきた諸先住民の「擁護と復権」[大貫ほか[編]1987:71]を目指す運動と一般には理解されるだろう。その起源、定義、時期区分をめぐってはさまざまな議論が存在するが¹⁾、ここでは19世紀末から20世紀前半に焦点を絞り、だれが何のためにインディオを擁護し復権させようとしていたのか、すなわち、インディヘニスモの主体とその目的を確認することから論を説き起こしたい。

世紀転換期前後のこの時代において、インディヘニスモの主体はだれだったのか。それはいまだインディオ自身ではなく、非インディオ、より具体的には、ラテンアメリカ各国のおおむね白人によって構成された知識人層であったといえよう²⁾。彼らは、自分たちとはまったく生活様式を違えるインディオを憐憫のまなざしで眺め、単に救済すべき対象ととらえていた

のであろうか。おそらくそうではあるまい。世紀転換期の前後は、まさにそうした人道主義的な動機を越えて、国民形成の観点からインディオ問題が取り上げられはじめた時期である。すなわち、国民形成という大いなる目的との関連で、インディオの擁護・復権は論じられたのであった。

以上のことから、本稿が再考の対象とするインディヘニスモはとりあえず次のように位置づけることができるだろう。すなわちそれは、国民形成に向けてインディオと非インディオとの関係はどうあるべきか、その「関係性」を模索した知識人の運動である、と³⁾。

では、ラテンアメリカの、とりわけこの場合ペルーの知識人が構想したインディオと非インディオの「関係性」を、われわれは具体的にどう探るべきであろうか。ここで注目されるのが「メスティサヘ」の概念である。「メスティサヘ」とは、インディオと白人の混血であるメスティーツから派生した語であるが、人種混淆という本来の語義を越えて、多様な社会的・文化的複合を含意するものともなっている。当時の知識人たちは、インディオと非インディオを関連づけるいわば結節点としてのメスティーツを、そして「メスティサヘ」の概念をどのように位置づけていたのであろうか。本稿が具体的に分析するのは、彼らの「メスティサヘ」をめぐる言説である。

ところで、既存のインディヘニスモ研究において、「メスティサヘ」のテーマはどのように扱われてきただろうか。ペルーについての研究では、インディヘニスモにかかわった知識人のおもに政治思想を取り上げ、インディオの置かれた状況を改善するために提起された改革プログラム自体の是非をもっぱら分析しているとの印象が強い。彼らがインディオとの「関係性」をどうとらえ、改革の先にどのような国民形成のイメージを描いているかに対しては、特に関心が向けられない。当然、「メスティサヘ」については触れられていない⁴⁾。翻ってメキシコ研究の場合を見てみると、インディヘニスモはある意味で「メスティサヘ」の一環として研究されてきたといっても過言ではないだろう。そして、「メスティサヘ」は国家統合を強力

に推進するためのイデオロギーであるとする広範なコンセンサスが存在しているかのようであり、ペルーとは逆の意味で一面的な印象を受ける⁹⁾。

このような、ペルーとメキシコのインディヘニスモ研究における「メスティサヘ」の取り扱いの相違は、両国の人口構成に規定されているといえるかもしれない。メスティーソ人口の多いメキシコにおいて「メスティサヘ」が重視されてきたのはいわば当然のことといえよう。では、ペルーの場合はどうなのであろうか。当該の時代において、ペルーのメスティーソ人口はいまだ少なく、むしろ白人とインディオが地理的（シエラ [アンデス山岳部] / コスタ [太平洋海岸部]）、言語的（スペイン語 / ケチュア語等先住民語）、経済的（近代産業部門 / 伝統農業部門）に分離した「二つの共和国」とも称される二重社会状態にあったことがしばしば指摘されている⁹⁾。しかし、それにもかかわらず、ペルーの知識人は国民形成に向けて「メスティサヘ」について語らざるを得なかったのであり、だからこそ、あらかじめ困難さを抱えた彼らの言説のなかに、メキシコのように一枚岩的な国家統合のイデオロギーに必ずしも還元しえない、インディヘニスモと「メスティサヘ」の関係のあり方を見出すことができるのではないだろうか。

以上のような視点から、本稿はペルー・インディヘニスモの再考を試みるが、具体的には以下のような構成をとるものとする。

1章では、太平洋戦争終結後の19世紀末に「インディオ問題」の解決に向けて改革の声を上げたマヌエル・ゴンサレス・ブラーダの思想を論じる。2章では、インディヘニスモの高揚期である1920年代のなかから、1927年にホセ・カルロス・マリアテギとルイス・アルベルト・サンチェスのあいだで交わされた「インディヘニスモ論争」に焦点を絞って分析する。3章では、中央のインディヘニスモの流れを汲みつつも地方から独自の立場を表明していたルイス・E・バルカルセルとホセ・ウリエル・ガルシアに注目し、ときを同じくして両者が提起した「新しいインディオ」像を比較検討したい。

なお、本稿が分析するインディヘニスモの論者は限られており、当該時

代全般をカバーした考察とはなっていないことをあらかじめお断りしておきたい⁷⁾。また、各論者の作品も網羅的に渉猟しているわけではないが、「メスティサへ」に関連した部分に限定して論じることにはそれなりの意義があると考えている。

1. 太平洋戦争と「インディオ問題」の提起

——マヌエル・ゴンサレス・プラダ

19世紀初頭の独立があくまでも少数のクリオージョ（新大陸生まれのイベリア半島系白人）中心で、広範な国民意識の形成を欠いていたことは、ラテンアメリカ諸国に共通の特徴である。19世紀後半以降、各国は近代国家に脱皮すべく統合化を推進してゆくことになるが、ペルーの場合、そのもっとも直接的なきっかけとなったのは、太平洋戦争（1879-1883）における敗北であったといえるだろう。

戦争のさなか、統制のとれたチリ軍により首都リマが攻略されるのを目の当たりにした当時の知識人たちは、ペルーとチリの国力の差を痛感し、戦後、国内改革の必要性を声高に訴えてゆくことになった。その中心人物がマヌエル・ゴンサレス・プラダ（Manuel González Prada, 1848-1918）である。

ゴンサレス・プラダの先駆性は、まず、ペルーの国民形成の核をはじめてまがりなりにも人口的に多数を占めるインディオに求めたところにある。しばしば引用される箇所であるが、チリに割譲された領土の回復を求めて1888年に開かれた集会での演説で、彼は次のように述べている。

真のペルーを形成しているのは、太平洋とアンデス山脈にはさまれた帯状地帯に居住するクリオージョや外国人の集団ではない。山脈の東側に散らばり住むインディオ大衆によって形成されているのだ [González Prada 1976: 45-46]。

では、インディオを視野に入れた国民形成はいかに実現されるべきなのか。ゴンサレス・プラーダは、同演説のなかではインディオに「読み書きを教えよ」[González Prada 1976 : 46] と述べ、いわば教育によるインディオの同化を主張していたが、1904年の論考「われわれのインディオ」に至って、教育だけによる効果を疑問視しはじめ、次のように訴えるようになる。

教育は人間を下賤な状態や奴隷身分に留めおくことにもなりかねない。[中略] 所有ほど人間の心理をすばやく根底から変えてしまうものはない。[中略] 「学校を」という者に対しては、「学校とパンを」と応じてやるがよい。インディオ問題は、教育問題である以上に、経済問題であり、社会問題なのである [González Prada 1981 : 189]。

このように、経済・社会問題の解決なくして「インディオ問題」の解決はありえないということを指摘した点でもゴンサレス・プラーダはその先駆性を認められているが、彼に対する一般的な評価は、政治思想としてはアナーキズムを選択したために具体的な問題の解決方法を示すことができず、その実現はのちの世代に引き継がれることになるというところに落ち着く場合が多い [原田 1980 : 100 ; 辻 1983 : 85]。しかし、ゴンサレス・プラーダの限界はその点だけにあったのであろうか。

ここで、ゴンサレス・プラーダの「われわれのインディオ」が、当時のヨーロッパの人種主義思想に対する批評ともなっていることはおおいに注目されてよい。彼は、人種を序列化し、なおかつ同一人種内にも格差を設けるフランスのギュスターヴ・ル・ボンをきびしく批判している⁸⁾。またル・ボンは、人種格差を強調するだけでなく、混血を墮落の元凶として嫌悪していた⁹⁾。こうした人種決定論は、ひとりゴンサレス・プラーダだけでなく、国民形成を目指す当時のラテンアメリカの知識人を等しく悩ませていた。彼ら自身はもっぱら白人であったが、国内には非白人であるインディオが多数を占めていた。したがって問題の解決は、人種決定論を表向きに

であれ否定し、インディオを社会的に底上げすることは可能だと説くか、あるいは逆説的であるが、混血によって社会全体の「白色化」を進めることを提唱するかであった¹⁰⁾。

ゴンサレス・プラダは、前者に関して教育の可能性を訴えたのであったが、後者の混血化の促進、つまり、「メスティサへ」についてはなにをいっていたのであろうか。次のような彼のことばを見てみよう。

われわれの血と肌の色ははなはだ曖昧であり、あからさまであれ不明瞭であれそれぞれに混着しているのであって、大勢のペルー人を目の前にして、各々がその体内にどの程度黒人や黄色人を含んでいるのかを定めようにも、われわれはただ戸惑うばかりである。たとえ瞳が青く金髪だったとしても、だれひとりとして純粋な白人とみなされるに値しない[González Prada 1981 : 188]。

ゴンサレス・プラダにとっては、「白色化」を云々する以前に、そもそもすべてのペルー人は混血なのであって、ある意味で彼は人種による差異を認めていない。また続く箇所では、「白い肌の人間と有色の人々を比較するのはなく、ある個人と個人を比べる」[González Prada 1981 : 188] ことも訴えている。

しかし、こうした側面をして、ゴンサレス・プラダが「人種の劣等性を否定」[友枝 1988 : 266] しているとするには一定の留保が必要であろう。彼は国民形成を求めてその中核にインディオを置くことを提唱したのだが、先の人種差否定の理念を当時のペルーの実態にあてはめたところで、現実にはなんら展望は見えてこなかったはずである。基本的にインディオと隔絶した環境に住むゴンサレス・プラダは、ペルーにおける国民形成がいかに多難でありうるか、それを緊迫感をもって感じるものが依然としてできなかったのだといえよう。つまり、ゴンサレス・プラダの想定する「メスティサへ」はきわめて抽象的で、その理想とは裏腹に、インディオと非インディオの「関係性」をきびしく追求した結果出された答えでは

なかったのである。

以上のことから、ゴンサレス・プラーダがのちの世代に引き継いだ課題というのは、「インディオ問題」を経済的・社会的にいかにか具体的に解決するかということだけではなく、国民形成を模索するならば、いかにその像を具体的にイメージできるかということだといえる。次章では、ゴンサレス・プラーダの影響を強く受けた、1920年代のインディヘニスモの動向を見ていこう。

2. 1927年の「インディヘニスモ論争」の相貌

—ホセ・カルロス・マリアテギ, ルイス・アルベルト・サンチェス

ラテンアメリカの1920年代はインディヘニスモがもっとも高揚した時代であったということができよう¹¹⁾。ペルーの場合も例外ではない。レギーア大統領政権下(1919-1930)で強力に推進された「統合のインディヘニスモ(官製インディヘニスモ)」は、その対抗勢力として「変革のインディヘニスモ」を生みだし、アブラ運動の創始者であるアヤ・デ・ラ・トーレや、独創的なマルクス主義者であるホセ・カルロス・マリアテギ(José Carlos Mariátegui, 1894-1930)など、多数の論客を輩出した[辻 1983: 91-92]。

ここで取り上げるのは、1927年1月から3月にかけて『ムンディアル』および『アマウタ』誌上で繰り広げられた、マリアテギと文人ルイス・アルベルト・サンチェス(Luis Alberto Sánchez, 1900-1993)¹²⁾のあいだで交わされた「インディヘニスモ論争」である¹³⁾。インディヘニスモの高揚のなかのごく一部を形成する議論に過ぎないが、そこでは国民形成に関連して興味深いやりとりがなされている。

この「インディヘニスモ論争」の直接のきっかけとなったのは、マリアテギの「国民文学におけるインディヘニスモ」という3回の連載である。これに対して、サンチェスが「インディヘニスタの雑然さ」と題した挑発的なコメントをし、以後、その他の知識人も巻き込みつつ、基本的に二人

を中心とした論争が展開された。マリアテギの「国民文学におけるインディヘニスム」は、のちに『ペルーの現実解釈のための七試論』(1928) [以下、『七試論』と記す]の最終章である「文学の過程」のインディヘニスム文学に関する節を構成することになるのだが、注目すべきは、サンチェスとの論争を経て書かれたと思われる、おもに「メスティサヘ」に言及した部分が『七試論』の段階で加筆されている点である。以下、この『七試論』で新たに加わった部分も含め、マリアテギとサンチェスの「インディヘニスム論争」の展開をたどってみることにする。

まず、マリアテギの「国民文学におけるインディヘニスム」の議論を整理してみよう。彼は、二重社会状態が続いているペルーにおいて国民性はいまだ「形成途上」にあると指摘し、依然として植民地主義下に置かれているインディオの「人口上の優位と社会的・経済的従属とのあいだの葛藤と対立」が解決されるべきであることを訴えている [Aquéolo Castro, ed. 1987: 34,36]。こうした指摘は、すでにゴンサレス・プラダによってなされていたことであるが、マリアテギはインディヘニスムの意義を「土着的なものの復権」と規定したうえで「社会主義」という具体的な方法を示し、問題の即時的な解決を主張した点で斬新であったといえる [Aquéolo Castro, ed. 1987: 37,38]。

上記のようなマリアテギの立場に対して、サンチェスはどのように論戦を挑んだのであろうか。彼の5回のコメントのなかでマリアテギに対する疑問がもっとも簡潔に示されている箇所を見ると、それは、コスタ対シエラ、すなわち白人対インディオという二項対立の図式を所与のものとしてとらえていること、インディオ共同体を理想化し過ぎていること、そして、「チョーロ」¹⁴⁾など第三項的社会層を含んだ包括的な運動の可能性を視野に入れていないこと、ほぼこの3点に集約される [Aquéolo Castro, ed. 1987: 81]。

これらのサンチェスの疑問に対して、マリアテギは次のような形で反論している。

私が征服により生じた二重性を強調するのは、それを解決する歴史的必然性を確信しているからである。私の理想は、植民地時代のペルーでもインカ時代のペルーでもなく、統合ペルーである。[中略] サンチェス氏は、私がチョーロを運動に含めていないのではないかなどと、どうして尋ねてくるのだろうか。これ [マリアテギの進めている運動] は総合的な復権運動ではなく排他的なものではないのかと、どうして尋ねてくるのか。サンチェス氏は、私の社会主義を考慮に入れていないだけでなく、私の書いたものも読まずに判断し反論してきていると思わざるを得ない [Aquézolo Castro, ed. 1987 : 84]。

このように、二人の議論はまったくかみ合っていないのだが、その原因はどこにあるのだろうか。ここでは敢えてそれを、すべてを社会主義に還元して説明するマリアテギにあるとしたい¹⁵⁾。マリアテギは、社会主義を目指す「闘士」として自分の立場は明確だが、サンチェスはあくまでも問題の「傍観者」であるとして、その立場ははなはだ曖昧であると述べている [Aquézolo Castro, ed. 1987 : 76-77]。しかし、マリアテギのいう、社会主義により導かれる「統合ペルー」のイメージもまた曖昧なのではないだろうか。彼は社会主義的変革の歴史的必然性をただ繰り返すだけで、「統合ペルー」のなかでインディオと非インディオの「関係性」がいかに再構成されるべきかについては具体的に語っていない。サンチェスがマリアテギに不満を抱いているのはまさにこの点である。

マリアテギの「統合ペルー」に代わって、サンチェスが説くのは次のようなことである。

私はコスタとシエラを図式的に対立させる何人かのやり方とは一線を画したい。そして、ペルーの活力あるすべての勢力が協同するようになることを望む。偏った支離滅裂な分離主義を説く愚かしい熱弁に従うよりも、統合化、包括化、共通の努力を目指すことを願って止まない [Aquézolo Castro, ed. 1987 : 94]。

「ペルーの活力あるすべての勢力が協同する」ことを説くこの議論は、いわばサンチェス流の「メスティサへ」の主張と置き換えてもいいたろう。サンチェスの立場は、いかなる社会変革を経て「メスティサへ」が可能になるかについてやはり曖昧さを残しているといえるが、ペルーのさまざまな要素を有機的に連関させた上でなければ、「統合ペルー」について安易に語ることはできないという主張は明確である。そしてこの点が、1927年の「インディヘニスモ論争」のなかでマリアテギの側にうかがえなかったものである。

マリアテギは、『七試論』で加筆した部分において、はじめて「メスティサへ」に言及することになる。だが、彼の「統合ペルー」のイメージは、むしろ不明瞭さを増しているといつてよい。

まずマリアテギは、ラテンアメリカにおける「メスティサへ」の流行を、ル・ボン流の悲観的な混血論に対抗するものとして一定評価しつつも、「スペイン人とインディオという二重性を解決するどころか複雑な変数を生み出す現象となっている」[Mariátegui 1988 : 339-340]と述べ、その否定的な側面を指摘している。彼にとって「メスティサへ」は、インディオと白人の二項に「複雑な変数」を持ち込むものに過ぎず、ましてや黒人や中国人といったその他の要素の「統合ペルー」への参入は、さらに複雑さを増すだけでなんの貢献ももたらさないとまで述べている[Mariátegui 1988 : 340-342]。マリアテギは図らずも彼の人種主義的側面を吐露しているわけだが、この点はマリアテギのいわば影の部分として強調されてよい。

インディオと白人が最終的にもつべき関係についても、マリアテギの議論はなお曖昧である。彼は、「メスティサへ」は民族問題としてではなく社会学的に考察されるべきだとして、次のように述べている。

したがって、インディオ、メスティソといった社会層の社会学的研究において重要なことは、メスティソが由来する人種からどの程度資質や欠点を継承しているかどうかではなく、インディオを白人の社会状態や文明形態

に向けていかに容易に発展させうるかというその能力の如何にある[Mariátegui 1988 : 343]。

これはある意味で、インディオから白人への一方的な同化主義を支持する主張とも受け止められかねない。ところが、別のところでマリアテギは、「征服、ラティフンディオ、ガモナル支配にもかかわらず、シエラのインディオはある意味で依然として彼らの固有の伝統のなかで行動している。「アイユ（インディオ共同体）」は環境と人種とにしっかりと根ざした社会形態である」[Mariátegui 1988 : 345]と述べ、インディオの社会主義の基盤としての強固さをいっており、先の主張との整合性がとれていない。

以上、マリアテギとサンチェスの「インディヘニスモ論争」を分析したが、マリアテギは、社会主義という「インディオ問題」を具体的に解決しうる手段を唱えつつも、社会主義によってインディオと非インディオの「関係性」はいかに再構成され国民形成の像を結ぶのかということに関しては必ずしも明瞭でないことが、サンチェスとの論争のなかで見えてきたといえるだろう。

しかし本稿の意図は、サンチェスを一方的に称揚し、マリアテギの思想のもっていた重要性を否定しようというものではない。ペルーの国民形成の必要性をはじめて唱えたゴンサレス・ブラーダがいわばその「意志」を表明したに過ぎなかったとすれば、マリアテギはそこにひとつの「理論」を注入したといえよう。ただ、『七試論』の2年後に夭逝した彼にとっては、「理論」を「現実」のなかで鍛える時間が決定的に足りなかったというべきであろう。ペルーの国民形成に向けたきびしい「現実」との対決は、さらにのちの時代に引き継がれなければならなかったのであり、また同時に、ゴンサレス・ブラーダやマリアテギ、サンチェスとは異なった視点からの「インディオ問題」へのアプローチも必要としていた。本稿が最後に検討するのは、地方の立場を代表する知識人の言説である。

3. 地方からの声としての「新しいインディオ」

——ルイス・E・バルカルセル, ホセ・ウリエル・ガルシーア

ここまで見てきたインディヘニスモの言説は、いずれも首都リマから発せられたものであったが、地方からの声がなかったわけではない。それはリマのインディヘニスモに少なからぬ影響を及ぼしながら存在してきたが、まとまった形で広く世に問われるようになるには次の二書待たなければならなかった。すなわち、民族学者ルイス・E・バルカルセル(Luis E. Valcárcel, 1891-1987)の著した『アンデスの嵐』(1927)と、随筆家ホセ・ウリエル・ガルシーア(José Uriel García, 1884-1965)の『新しいインディオ』(1930)である。

バルカルセルとガルシーアの二人は、いずれもかつてインカ帝国の中心であったクスコに拠点をもつ知識人である。リマとクスコはそれぞれ独自のインディヘニスモを発展させてきた経緯があるが、「リマにおける観念性・理論性・政治性、クスコにおける日常性・現実性・実証性」[辻 1983 : 84]と対比されるように、クスコのインディヘニスモは日々インディオと接するなかで生まれ試されてきたという背景をもつ。

さて、前述の二書には、バルカルセルの『アンデスの嵐』への批判としてガルシーアの『新しいインディオ』が書かれたというそもそもの経緯があるが、二人はいずれも「新しいインディオ」ということを打ち出している。二人の「新しいインディオ」にはどのような異同があるのだろうか。また、それはいかなるインディオと非インディオの「関係性」の指針を示しているのだろうか。

はじめに、バルカルセルとガルシーアの共通点を確認しておくと、それは、両者とも環境、具体的には、大地や景観といった風土が人間形成に大きな影響を与えるととらえていることである。これはおもにフランスの実証主義者イポリート・テーヌの方法論を継承しているといわれている [Poole 1992 : 54 ; Tamayo Herrera 1980 : 187]¹⁶⁾。二人にとっての環境とはクス

コ周辺のシエラ南部にほかならないが、こうして、「インディオ問題」ははじめて具体的な場に依拠した議論が可能になり、「新しいインディオ」も、インディオと非インディオの「現実」に即した「関係性」を模索しうる概念として注目されるのである。

まず、バルカルセルの「新しいインディオ」像から検討してみよう。しばしば誤解されていることだが、バルカルセルの主張は本人も強調しているように、「インカ時代を復古させようとするものではない」[Valcárcel 1975: 22]。ただし、彼が白人、メスティーツを否定的にとらえて「新しいインディオ」による社会を構想していることは否めず、特にメスティーツに対する批判は熾烈を極めている。

ペルーではインディオが唯一の労働者である。[中略] メスティーツと白人が享楽に身をまかせて無為に過ごしているあいだに、インディオがすべてをおこなった。[中略] 優雅なる寄生という近代のウィルスが、欧化された首都の扉を開いてペルーに侵入してきたのであった [Valcárcel 1975: 103-104]。

理性に立ち返るがよい、二つの世界をもつという人々よ。汝等は「白い」人間と称するが、とらえどころのないメスティーツに過ぎず、ヨーロッパの傲慢さに汚されているのだ。「文明化した」という思いこみは汝等自身を損なう。[中略] 汝等の蒙昧ぶりは救いようがない。赤銅色の肌をした民を、依然として汝等とは異なる劣った種と見なし続けているのだから [Valcárcel 1975: 24-25]。

このように、バルカルセルはインディオ以外の存在をいっさい認めないかのようなのである。さらに地域でいえば、彼にとっては、インディオが多数を占める「シエラが国民性」 [Valcárcel 1975: 115] そのものなのであり、やがてシエラからインディオが降りていってコスタを包囲するというのが、「アンデスの嵐」というタイトルが象徴していることである。

いささか荒唐無稽の感を免れないのだが、では、非インディオ（バルカルセル自身白人である）はこの「新しいインディオ」が築く社会にいっさ

いかかわれないのだろうか。つまり、議論を立てる本人さえも排除してしまう性格のものなのだろうか。このような問いに対して、バルカルセルは次のような回答を用意していた。

先住民の独裁は彼らのレーニンを探している。シエラの懐に住まうわれわれは、ひとつの世界が誕生するという宇宙創造の行為に参加する特権をもっている。ちょうど、稲妻に打たれる沃野を吹き荒れる嵐という崇高な光景を見つめている旅人がそうであるように。危険のさなかの特権なのだ。インディオ性の中心であるクスコでは、知識人の中核が見守っている。クスコ派は [中略]もうかなり前から組織され鍛えられてきたのだ。[中略]この選ばれた集団は、欧化に抗してインディオ性を擁護するため、ヨーロッパの技術を押収するだろう。[中略] 未来は彼ら [インディオ] を導く者の手にかかっているのだ [Valcárcel 1975 : 125,127]。

インディオを全面的に称揚し「メスティサへ」を否定したバルカルセルが唯一インディオと通じる道は、自らを前衛としてインディオの指導的立場に置くことであった。彼は地方の「現実」から出発しながらも、結局、マリアテギと同様に社会主義という「理論」を選択することになったのである¹⁷⁾。

一方、ガルシーアの「新しいインディオ」像はどうだろう。彼は、バルカルセルがあたかもインディオだけがアンデスの環境から影響を受けているかのように理解していることを批判する形で、次のような見解を示している。

「インディオ」は、褐色の肌、切れ長の目、直毛の太い髪をもった人々だけを指すのではない。このアメリカ大陸の偉大な自然が与える刺激を内面化して育ち、みずからの魂が大地に根ざしていると感じる者はすべてインディオなのである。[中略]したがって新しいインディオとは、ある特定の民族集団というよりはむしろ道徳的な総体なのである [García 1973 : 8]。

そしてガルシーアは、「インカ性」と「インディオ性」とを明確に区別する。彼は、前者は「永遠に死に絶えた」もの、後者を「アンデス山脈がそびえ立ち、アメリカの沃野が豊穡の力を有しながら感情と理想をたえまなく刺激する限り生き続ける」ものとし [García 1973: 85]、たとえば、以下のようにも述べている。

われわれのインディオ性は [一般に理解されているものとは] 別物である。なぜなら、それは1492年をもって装いを新たにしたのであり、アメリカがその閉じられた素朴な境界を世界に対して開いて以来、絶えず刷新されてきたものなのである [García 1973: 90]。

このように、ガルシーアのいう「新しいインディオ」とは、次に示す引用が適切に表現しているように、まさに「メスティサヘ」の帰結にほかならなかったといえるだろう。

ガルシーアにとっては、インディオとスペイン人のあいだの絶対的な文化的差異は征服以来存在してこなかった。アンデス文化は4世紀に及ぶ植民地主義と人種的「メスティサヘ」の産物であり、その結果、今日のクスコにおいて文化的「他者」は存在しない。それゆえ、もし未来のアンデス文化が構築されるとすれば、それは農民と知識人を同様に取り込んだ統一的な高地アイデンティティを築くことによってしかなし得なかったのである [Poole 1992: 59]。

ガルシーアの「新しいインディオ」像、すなわち「メスティサヘ」では、インディオが被った植民地以降の従属の歴史をいかに処遇するかという点が棚上げされていることは事実である。しかし、国民形成にむけたインディオと非インディオの「関係性」の模索は、ここではじめて、クスコというインディオと非インディオが日常的に接触する場を出発点におこなわれているといえよう。それはあらかじめ存在する実体的な関係に基づいており、ゴンサレス・プラーダやサンチェスが語った抽象的な「メスティサヘ」

でもなければ、マリアテギやバルカルセルが「理論」から導いたものとも異なったものである¹⁸⁾。

ただし、ガルシーアの「メスティサへ」の限界としては、シエラという環境にこだわるあまり、国民形成というレベルでいえば逆に広がりやを欠いているということが指摘できるだろう。たとえば、マリアテギは、おそらく『新しいインディオ』以前に書かれた同趣旨のガルシーアの文章に触れていたらしく、前章で取り上げた『七試論』の加筆部分のなかで次のように述べていた。

数世代に渡って、たえず同一の土地・文化環境から影響を受けてきたこの[ガルシーアのいう]メスティソは、すでに安定した特徴を獲得しているであり、コスタで同種の人種間に生まれたメスティソとは異なっている。コスタにおけるメスティソの刻印は不鮮明である。スペイン系の要素がより強力なのである [Mariátegui 1988 : 340]。

ここでふたたび、コスタとシエラという二項対立が浮かんでくるのであるが、マリアテギであれガルシーアであれ、ペルーの国民形成を模索するにあたって、この図式は乗り越えがたいものだったのだろうか。おそらく、当時においてはある程度やむを得ないことだったにちがいない。しかしながら、時代はまさに端境期にさしかかりつつあったといえるだろう。以後、1950年代を境に顕著になるペルー社会の構造的変容は、コスタとシエラの二分法をはじめとして、それまで知識人が依拠してきた多くの前提を突き崩してゆくことになる。インディオと非インディオの差異を暗黙の前提としたうえで国民形成を語りえた状況は、今世紀の半ばをもって終焉を迎えるのである。

おわりに——インディヘニスモを越えて

本稿が試みてきたのは、「メスティサヘ」をキーワードに、おもに国民形成のあり方との関連でペルーのインディヘニスモの言説を再考することであったが、以下の点を結論および今後の展望として述べることができるだろう。

まず、ペルーのインディヘニスモが「メスティサヘ」に関連して研究されることはこれまでまれであったのだが、ゴンサレス・プラダからガルシアに至るまで、視点はそれぞれ異なるとはいえ、「メスティサヘ」を何らかの形で論じていたことが明らかになった。彼らが、国民形成をめぐるインディオと非インディオの「関係性」を模索しようとする意図をもっていた以上、それは当然のことだといえよう。「はじめに」でも触れたように、インディヘニスモは単独の思想潮流を形成していると一般にみなされがちで、とりわけペルーにおいてその傾向が強いのだが、今後は、「メスティサヘ」をめぐる言説を軸に、他の近接する領域（イスパニスモ、人種主義思想など）と比較して研究が進められるべきである¹⁹⁾。

いまひとつは、インディオと非インディオの二項対立という、本稿も一応の前提としてきた枠組みにかかわることであるが、今世紀前半までのペルーの知識人はこの両者の乖離を前提としたうえで、敢えてそれらを結びつけるべく「メスティサヘ」を語っていたといっていいただろう。「メスティサヘ」は、いわば国民形成を成し遂げるための「必要性」に過ぎなかった。

しかしながら、3章の最後で若干触れたように、この二項対立の図式は今世紀の中葉に決定的な転換を迫られる。1950年代以降のペルー社会の構造的変容はシエラからコスタへの大規模な人口移動を引き起こし、都市のインディオ人口を増大させ「民衆の氾濫」というべき状況をもたらした²⁰⁾。都市の知識人にとって、インディオはもはや机上の存在ではなく、日々街角で出会う存在となった。シエラ出身者がおもに不法占拠により住みはじめた居住区「バリアード」(公称では「プエブロ・ホベン」)は、首都リマ

の伝統的な街区を取り囲むように形成されている。バルカルセルは、初刊行から44年を経た『アンデスの嵐』の版に寄せた序文のなかで、自らの書の限界を認めつつも、次のように述べていた。

私の予言した「アンデスの嵐」はついぞ生じなかった。ただ、稲光と雷鳴をともなった嵐こそ起こらなかったが、代わりに、この20年のあいだにおいてただしい人の洪水がリマやその他の都市に降りかかった。百万を超える人々が、侵略軍のように、しかし武器はもたず、首都を「占拠」したのである。「嵐」はいまわれわれの内部で吹き荒れている [Valcárcel 1975 : 8]。

非インディオは、自らが拠って立つ社会的・文化的基盤の動揺を射程に入れることなく、インディオとの「関係性」を論じることはできなくなったといえる。ゆえに、今日に至る過程で、「メスティサヘ」を語ることはもはや一方的な国民統合のための「必要性」だけではありえず、ますます多元化・混濁化する社会が要請する「必然性」ともなりつつある。多様ななかでの共生を模索する原理としても、「メスティサヘ」の研究は今後さらに深められてゆくべきである²¹⁾。

[付記]

本稿は1994-95 (平成6-7) 年度文部省科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) による研究成果の一部である。

注

- 1) インディヘニスモの起源は、古くはアメリカ大陸征服後のラス・カサス神父の活動まで遡るとする場合もあるが、一般的には19世紀の独立期以降と考えるのが妥当であろう。その定義に関しては、インディオを社会経済的側面と文化的側面の両面からとらえる見方が主流である [Franco 1967: 107; 国本 1977: 110, 注(4)]。なお、時期区分をめぐっては、19世紀中葉のロマン主義的な動向を「インディアニスモ」と呼ぶ場合もあるが、本稿では特にこの区別を意識していない。
- 2) この点においてラテンアメリカは、たとえば、ブッカー・T・ワシントン、W・E・B・デュボイスら黒人エリート指導者を早くから輩出し、1920年代には黒人中心の「ハーレム・ルネッサンス」を迎えたアメリカ合州国や、同じくエメ・セゼールら黒人知識人による「ネグリチュード」運動が1930年代以降盛んになったフランス領カリブ地域とは大きく異なっている。
- 3) インディオと非インディオを「関係性」においてとらえるという点で、本稿は友枝啓泰と関心を共有している [友枝 1988: 262-263]。ラテンアメリカに限らず、国民形成が多分に創造的なプロセスであることについては、ベネディクト・アンダーソンの書を参照されたい [Anderson 1993]。なお、日本研究ではあるが、知識人による国民形成の模索を「自画像」の描出ととらえた小熊英二の論も参考になった [小熊 1995]。
- 4) 原田 1980, 辻 1983などにそうした傾向が見受けられる。
- 5) たとえば、高山智博は次のように述べている：「メキシコでは1910年にはじまるメキシコ革命以後、メスティソ的なものが、国民とその文化のシンボルとして認識されるようになり、その上で新たな国民文化の創造が自覚した知識人によって推進されたのである。インディヘニスモ (indigenismo) と呼ばれるものも、メスティソのイデオロギーから生まれたものであり、インディオ、つまり原住民を国民文化 (cultura nacional) の中へ統合することを目標としていた」 [高山 1985: 364]。
- 6) 網野徹哉によれば、「二つの共和国」はペルー植民地期以来の空間概念である。しかし網野は、すでに植民地時代から、「スペイン人の共和国」と「インディオの共和国」のあいだには多様な交流があったことにむしろ注意を向けている [網野 1992: 250-251]。
- 7) より概説的な研究としては、Kristal 1988, Tamayo Herrera 1980, 友枝 1988, Tord 1978等を参照されたい。
- 8) ル・ボン は、ラテン系の白人はアングロサクソン系の白人に劣るが、同じ

ラテン系でも、ヨーロッパのラテン系に比べてアメリカ大陸のラテン系はさらに劣っているとしている[González Prada 1981: 179-181; Le Bon 1965: 193]。

- 9) ル・ボンの混血忌避については、取りあえず、松下 1993, 小熊 1994を参照した。
- 10) 松下マルタは、ラテンアメリカの知識人の抱えるこうしたジレンマを「異端の人種論」と呼んでいる [松下 1993: 72]。なお「白色化」については、ブラジルの事例として鈴木 1993が参考になった。
- 11) その背景として、文化的なレベルでは、第一次世界大戦後の「西洋の没落」(オズワルド・シュベングラー)を受けて、「根源への回帰」という表現に象徴されるように、アメリカ大陸の土着的なものへの関心が高まりを見せていたことを指摘できる。また政治のレベルでは、メキシコ革命、ロシア革命の余波を受け、社会体制の根本的変革への期待が高まっていたことも見逃せない [Franco 1967: 69-71]。
- 12) サンチェスはペルー・アブラ党の草創期からのメンバーでもある。サンチェスの思想的背景としてアブラ運動との関わりは重要であるが、本稿ではそこまで立ち入ることが出来なかった。なお、アブラが政党に改組されたのは1930年で、ここで取り上げる「インディヘニスモ論争」以後のことである。
- 13) マヌエル・アケソロ・カストロが編纂した書 [Aquézolo Castro, ed. 1987]により、われわれは論争の一部始終を容易に知ることができるようになった。ただし、いくつかの記事の初出データに誤りがあるので注意が必要である。
- 14) もとは、社会上昇を遂げ、白人の生活様式を模倣するインディオに対する侮蔑語。ここでの用法は、価値中立的にメスティーソと置き換えて理解しても差し支えないだろう。
- 15) この点において、本稿の「インディヘニスモ論争」に対する評価は、辻豊治のそれとは異なっている [辻 1983: 104-105, 注(80)]。もっとも本稿は、従来行われてきた階級論的な視座からマリアテギの思想を評価することを否定するものではない。
- 16) テーヌは、正確には、人種・環境・時代の三要素の相互作用による精神の決定論を主張していた [テーヌ 1993: 36-48]。
- 17) マリアテギはインディオに関する情報収集でバルカルセルに負うところが大きい。なお、『アンデスの嵐』の序文は好意的な立場からマリアテギが、あとがきは批判的な立場からサンチェスがそれぞれ書いていることは興味深い。
- 18) しかし、ガルシーアもやがては社会主義へと傾斜してゆくことになる。たとえばそれは、1950年に書かれた「ペルー社会学の諸問題」という論文のなかに明らかである [García 1950]。
- 19) 日本における「メスティサヘ」研究は数少ないが、そのひとつとして大貫

良夫の論考をあげることができる [大貫 1984]。大貫の議論の延長に、たとえば、インディヘニスモの論者を加えてゆくことは意義深いことだと思われる。

- 20) こうしたペルー社会の変動については, Bourricaud 1975, Matos Mar 1988, 遅野井 1985等を参照されたい。
- 21) 筆者は取りあえずの試みとして, ペルーの作家ホセ・マリーア・アルゲダス (José María Arguedas, 1911-1969) の「メスティサヘ」像を論じたことがある [後藤 1994]。「メスティサヘ」については, 昨今アメリカ合州国を中心に賑わいを見せている「多文化主義」の議論や, カリブ地域をモデルとした「クレオール」論なども比較研究してみたいところである。

文献一覧 (必要な場合には, [] 内に初出年を示してある)

網野徹哉 (1992) 「インディオ・スペイン人・「インカ」」 歴史学研究会
[編] 『南北アメリカの500年①・「他者」との遭遇』 青木書店

Anderson, Benedict (1993), *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Revised Edition, New York, Verso. [ベネディクト・アンダーソン (1987) 『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行——』 リプロポート]

Aquézolo Castro, Manuel, ed. (1987), *La polémica del indigenismo*, Lima, Mosca Azul Editores.

Bourricaud, François (1975), “Indian, Mestizo, and Cholo as Symbols in the Peruvian System of Stratification”, Nathan Glazer; Daniel P. Moynihan, eds., *Ethnicity: Theory and Experience*, Cambridge, Harvard University Press.

Franco, Jean (1967), *The Modern Culture of Latin America: Society and the Artist*, London, Pall Mall Press. [J・フランコ (1974) 『ラテン・アメリカー文化と文学——苦悩する知識人——』 新世界社]

García, José Uriel (1950), “Problemas de sociología peruana”, *Cuadernos Americanos*, Vol. 50 (Año 9), No.2.

——— (1973), *El nuevo indio*, [1930], Lima, Editorial Universo.

González Prada, Manuel (1976), “Discurso en el Politeama”, [1888], *Páginas libres. Horas de lucha*, Caracas, Biblioteca Ayacucho.

——— (1981), “Nuestros indios”, [1904], *Horas de lucha*, Lima, Editorial Universo.

後藤雄介 (1994) 「インディヘニスモから「メスティサへ」へ——ホセ・マリーア・アルゲダスのペルー社会像——」 『イベロアメリカ研究』 Vol. 16, No.1.

原田金一郎 (1980) 「ペルーにおける共同体と社会主義」『インパクト』
No.5.

Kristal, Efraín (1987), *The Andes Viewed From the City: Literary and Political Discourse on the Indian in Peru, 1848-1930*, New York, Peter Lang.

国本伊代 (1977) 「ペルーの近代化とナショナリズム——軍部による改革への道——」増田義郎 [編] 『ラテンアメリカのナショナリズム』アジア経済研究所

Le Bon, Gustave (1965), *The Psychology of Socialism*, [1899], Wells, Fraser Publishing Company.

Mariátegui, José Carlos (1988), *7 ensayos de interpretación de la realidad peruana*, [1928], Lima, Amauta. [ホセ・カルロス・マリアテギ (1988) 『ペルーの現実解釈のための七試論』 柘植書房]

Matos Mar, José (1988), *Desborde popular y crisis del Estado: El nuevo rostro del Perú en la década de 1980*, Lima, José Matos Mar Editor.

松下マルタ (1993) 「社会ダーウィニズムからインディヘニスモに向けて——ラテンアメリカ思想史における人種問題の位相——」歴史学研究会 [編] 『南北アメリカの500年③・19世紀民衆の世界』 青木書店

小熊英二 (1994) 「差別即平等——日本植民地統治思想へのフランス人種社会学の影響——」『歴史学研究』 No.662.

——— (1995) 『単一民族神話の起源——<日本人>の自画像の系譜』 新曜社

大貫良夫 (1984) 「メスティソの誕生」大貫良夫 [編] 『民族の世界史13・民族交錯のアメリカ大陸』 山川出版社

大貫良夫, 落合一泰, 国本伊代, 福嶋正徳, 松下洋 [編] (1987) 『ラテン・アメリカを知る事典』 平凡社

遅野井茂雄 (1985) 「ペルーの政治社会変動——転換期社会に関する序論

的考察——」小坂允雄, 丸谷吉男 [編] 『変動するラテンアメリカの政治・経済』アジア経済研究所

Poole, Deborah (1992), "Figueroa Aznar and the Cusco Indigenistas: Photography and Modernism in Early Twentieth-Century Peru", *Representations*, No.38.

鈴木茂 (1993) 「「人種デモクラシー」とブラジル社会」中嶋嶺雄, 清水透 [編] 『転換期としての現代世界——地域から何が見えるか——』国際書院

テエヌ, イポリイト (1993) 『文學史の方法』岩波文庫

高山智博 (1985) 「インディオ文化・メスティーソ文化・アフリカ文化」加茂雄三 [編] 『ラテンアメリカハンドブック』講談社

Tamayo Herrera, José (1980), *Historia del indigenismo cuzqueño, siglos XVI-XX*, Lima, Instituto Nacional de Cultura.

友枝啓泰 (1988) 「ペルーのインディオと国民的アイデンティティ」川田順造, 福井勝義 [編] 『民族とは何か』岩波書店

Tord, Luis Enrique (1978), *El indio en los ensayistas peruanos, 1848-1948*, Lima, Editoriales Unidas.

辻豊治 (1983) 「ペルーインディオヘニスモの形成と展開——1920年代インディオヘニスモ論争をめぐって——」『ラテンアメリカ研究年報』No.3.

Valcárcel, Luis E. (1975), *Tempestad en los Andes, [1927]*, Lima, Editorial Universo.